Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-12

組織目的概念の学説史的(再)検討 : シンボル概念の彫琢をめざして

竹中, 克久

(Citation)
社会学雑誌,20:163-175

(Issue Date)
2003-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011007

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011007

組織目的概念の学説史的（再）検討

――シンボル概念の彫琢をめざして――

竹中克久
神戸大学大学院文化学研究科博士課程

はじめに

組織とは共通の目的[1]達成のためのシステムである、との前提が伝統的な組織論には存在する。しかし、これは過度に単純な図式でなかろうか、という疑問については、組織論者はもちろんのこと、一般の社会学者にとっても悩みの種である。ここで、今一度、組織目的の概念に再考を加えることは意義があると考えられる。本稿では、機能主義、解釈主義という社会学の二つの理論を対比しながら、目的という概念がいかに創り上げられ、理論が展開されているかをみてゆくなかでその共通点と差異について論じる。

本稿では、T・パーソンズとH・ブルーマーの見解を参照しながら機能主義と解釈主義の共通点と差異について論じる。まず、J・H・ターナーの論考を足がかりとして考察を進め、二つの理論の共通点としてシンボル概念があることと、両者ともが秩序志向の理論であることを示す。また差異として、両者の理論構築のプロセスを指摘する。端的には、機能主義者は研究対象を「切り取る」ことで理論の定式化を行うことを重視するのに対し、解釈主義者は研究対象を絶えず進行中の過程として分析することを重視するところに、決定的な差異があると考える。結論としては、組織目的概念を理解するためには、組織シンボリズムの有する見解にみられるような、シンボル概念の彫琢こそが不可欠であることを示す。

一　機能主義と解釈主義の共通点と差異

そもそも、機能主義と解釈主義の対立がこれほど自明視されている背景には、一九七〇年におけるT・P・ウィルソンの論考（Wilson 1970）の存在があると考えられる。ここではきわめて概略的に述べるに留めるが、ウィルソンは、

機能主義を「規範的パラダイム」、解釈主義を「解釈的パラダイム」とカテゴライズし、前者を客観志向のマクロ社会学、後者を主観志向のミクロ社会学と位置づけている。この区分は、後にJ・F・アレクザンダーやA・ギデンズによる再構成によって、いくぶん不鮮明なものになりつつあるものの、やはり、一九七〇年という時点におけるウィルソンの論考が与えたインパクトは大きなものであったことは推察できる。この時点において、機能主義と解釈主義の対立はある意味神話化されたともいえよう。

ここに、一九七〇年代中頃の *Sociological Inquiry* 誌上で、ターナーが投げかけた論考「シンボリック相互行為論者としてのパーソンズ」(Turner 1974) がある。そしてこの論考に対しては即座にブルーマーとパーソンズがコメントを寄せ、ターナーはその論争を纏めようとした(Blumer, Parsons, and Turner 1974)。そしてターナーは、この二本の論考において、両者の理論の類似性を強調しながら双方は収斂する可能性を示している。

ターナーはまず、パーソンズの理論を「行為論」、ブルーマーのそれを「相互行為論」と位置づける。そのうえで以下の三点を主な類似点として掲げている。それは①行為者の状況への志向、②社会組織のとらえかた、③人間のパーソナリティ、である(ただし、本稿では③の人間のパーソナリティについては言及しない)。まず①について、パーソンズは初期の『社会的行為の構造』はもとより、「構造―機能分析」を提唱する中期の『社会体系論』以降においても一貫して行為論を展開していると指摘したうえで、「行為者―状況―志向」というプロセスの中では、行為論も相互行為論も、とりわけ「シンボル」を使用する人間像を前提としているという点では類似していると述べる。そして、パーソンズのいう「パターン変数」の選択と相互行為論者のいう「解釈」という概念には類似点があると指摘している。(Turner 1974: 283-6)。次に、②の社会組織について、ブルーマーは「連携的行為 (joint action or act)」の集積体としてとらえ、パーソンズは「社会システム」としてとらえたが、双方とも「制度化institutionalization」という文脈では類似しているとする (Turner 1974: 286-7)。そして、両者の見解はそれぞれの理論構築のプロセスに大きな差異が見受けられるとしながらも、ターナーは最終的に「パーソンズはシンボリック相互行為論者である。そして、相互行為論者は行為論者である」(Turner 1974: 292) と述べるにいたる。

しかし、この指摘に対してブルーマーは激しく反駁する。まず、①にかんしては、シンボリック相互行為論者の想定する「解釈」というものは、行為者がそれぞれのパターン変数のどちらかを行為する以前に選択するというパーソンズ的な行為とは異なるうえに、「僅か五つ！」の二分法的

なものに還元できるものではない、と反論する［強調・感嘆符はブルーマー］。そして、②にかんしては連携的行為とは「行為の『組織 organization』ではなく、行為の『組織化 organizing』」であり、そのプロセスこそを分析することこそが肝要であるとする（Blumer, Parsons, and Turner 1974: 59-60）。

他方、パーソンズは穏やかな口調で、ターナーに対して、自らの理論の位置づけをきわめて明確にしたという点で「重要な貢献」をしている、と賞賛の言葉を返している。ブルーマーとは異なり、①、②という議題について、それほど区分してコメントを返しているわけではないが、五つのパターン変数とは、行為ないし相互行為の構造を非常に多様な選択肢から構成されたものであるとし、小集団の分析とマクロレベルの社会の分析を架橋することこそが理論的な意義をもつと述べている（Blumer, Parsons, and Turner 1974: 62-5）。

続いてターナーはパーソンズよりの姿勢をとる。そして両者の議論の「すれ違い」を集約するために、いくつかの論点を提示する。そのなかで重要と考えられるのは、個人から社会関係、そして集合体へと分析レベルの上昇に伴い、いかにしてその創発性をとらえるのか、という論点である。ここでターナーは、パーソンズの理論には「補足概念 additional concept」があり、分析レベルの差異に応じて概念が追加されているが、ブルーマーの理論のなかにはそれを見いだすのが困難であると述べる。

この論考はブルーマーの短いコメントで終了しているが、折角のターナーの努力は、パーソンズとブルーマーには届かなかったようだ。両者は「すれ違った」ままであった。とりわけ、本稿における組織というテーマにかんして、であるが。

ここで、両者の主張の差異と共通点を確認しておこう。まず、差異としてあらわされているのは行為ないし相互行為とは進行中のプロセスなのか、そうでないのか、という点である。そしてそれを分析する際に、どのような理論構築を行うか、という点である。次に、共通点は「シンボル」概念であり、これは双方ともが重視するものである。そして、ターナーはそれほど明示的には指摘することはなかったが、双方とも秩序志向（Wilson 1970）ないしレギュレーション志向（Burrell and Morgan 1979）の理論であるという点も共有されている。レギュレーションと言えば聞こえが悪いかもしれない。しかし、これはG・バレルとG・モーガンの用語であり、いかにして社会秩序が可能になるかを志向する理論であるということである。裏を返せば、人間の主意（性）（ボランタリズム）を想定しているがゆえに、ある種のレギュレーションの必要性を考えるのである。人間の社会が「万人の万人に対する闘争」に陥らないのはなぜなのかを問い、

「なぜ社会が一つの実在として維持されるのかを理解しようとする」(Burrell and Morgan 1979=一九八六、二二)スタンスは共有されているのである。

さて、本稿ではそのような社会秩序、あるいは組織秩序といったものを可能にさせるものとして、組織目的という概念に着目したい。機能主義と解釈主義、両者を対比するには数多くの概念・見地が考えられるが、本稿ではそのなかでも「組織目的」というトピックに限定して考察をすすめてゆく。なぜ、「組織目的」に着眼点をおくのか――それは、この①目的概念の内容、そして②目的設定の主体について、二つの理論の比較を行うことがもっとも生産性の高い議論が展開できる、という仮説が本稿にはあるからである。

詳しくは次節からの展開に委ねるとして、ここでは簡単に「組織目的」にかんする二つの理論の差異を論じておこう。

まず、機能主義の有している目的概念は、所与的なものであり、かつ機能的「要件」としてシステム概念のなかに「埋め込まれて」いるものである。また、行為→集団・組織→全体社会というマクロ方向への分析レベルの上昇にともない、高次の目的概念を創発することが機能主義の特徴である。個人行為者の目的は、個人の目的という観点からも考察できるが、その個人が属する組織目的という観点からも考察でき、その場合は、行為者の組織への貢献という観点から「機能」を問うことができる。同様に、組織目的についても、その組織が全体社会のなかで果たしている「機能」によってその組織目的を説明できる。このように、常に一つ高次の観点を有するというのが機能主義の特徴である。また、このような理論構築を可能にするためには、科学者の位置がその研究対象の「外側」に立つ必要がある。各行為者から独立した位置に立つからこそ、客観的な目的を設定することが可能になるのである。その結果、目的は当の行為者が「純粋」に思い描くものではなく、科学者が分析上、設定したものとなる。ここでは、行為者と科学者は別者として峻別され、その差異は決定的である。

他方、解釈主義の有する目的概念は機能主義のそれとは著しい差異を示している。極言すれば、彼ら解釈主義の立場からすれば、集団・組織あるいは全体社会という観点すら希薄である。彼らはすべての社会的事象を相互行為の文脈にいわば「還元」することで説明を加えようとする。彼らは決して社会を´E・デュルケームのように個人に外在する事物としてはとらえない。個人の営為から離れたそのような事物は存在しないのであり、全てが相互行為の所産として考えられるのである。また、解釈主義は機能主義のように科学者が無根拠に科学者であることにも懐疑的である。現象の本質を説明しようとすれば、当の行為者の主観

的な意図をみる必要があると彼らは考える。もちろん、その主観的な意図という色彩を強く放つ目的という概念も当の行為者が想定しているものである。その上で、我々が科学者として客観的分析が可能になるとすれば何が求められるのか、そもそも我々はいったい誰なのか、といったことに関心をもつのである。

このようにみれば、まず、機能主義と解釈主義は、高次の目的の「創発」か、行為者の目的への「還元」か、という目的概念に関する方法論の上で著しい差異を示している。また、その目的を創り出す主体も機能主義は「科学者」、解釈主義は「当事者」というように明確な差異が認められる。このような社会学一般の議論を、組織論に投射してみよう。すなわちそれは「組織目的」という概念を二側面から検討するという試みにあらわされるだろう。

二　要件としての目的——機能主義の目的観

前節で述べたように、機能主義の特徴は高次の目的を「創発」することにある。機能主義の文脈では、組織目的は、その組織が全体社会において果たしている「役割」である。また、目的は機能的要件であり、組織が存続するためには決して欠くことのできない前提条件である。パーソンズのAGIL図式でいえば、G機能がそれに該当するものであり、それはシステムの前提条件として「埋め込まれて」いる。目的とは所与のものであり、要件である。また、科学者の立脚する見地ないし「地位」についても、機能主義は特徴的である。彼らは自然科学者のように絶えず研究対象の「外側」にいる。

本節では、機能主義的な組織論者として再びパーソンズを取り上げる。確かに、彼の膨大な原稿のなかでは、組織を直接的に主題化したものはそれほど多くない。しかし、全体としての著作の量が膨大であるため、一組織論者として十分であるほどの論考がある。とりわけ「中期」と呼ばれる一九五〇年代には組織にかんする重要な論文をいくつか発表しているほか、「後期」と呼ばれる一九六〇、七〇年代に入っても政治や大学などの研究を重ねていたこともあり、組織という対象は常に彼の関心の一部にあったといって過言ではない。当然ながら、年を重ねるにつれ、パーソンズの組織論は「発展」を続けていた。とりわけ「中期」に発明した「シンボリックに一般化されたメディア」という概念を抜きに彼の「後期」組織論は語ることはできない。

しかし、あえて本稿ではその彼の組織論が大成する「中期」以降にはあまり目を向けず、むしろ彼の「初期」から「中期」にかけての理論変遷の時期に焦点をあわせたい。なぜなら、この時期は彼の行為論が一応の完成をみ、その行為論を基礎として集合体ないし組織の理論を展開する変

遷期であり、「ミクロからメゾへ」という理論の結節のために彼がとった戦略はどんなものであったのか、それをみるにはこの時期に着目する必要があると考えられるからである。そのため「中期」「後期」については稿をかえて論じたい。本稿では、まずもって彼を行為論者として位置づけ、その上で組織論ないしシステム論を展開していったと考えてゆく。

ともかくも、そのような彼による組織の定義は以下のようなものである。「組織とはシステムであり、その目的の達成として他のシステムによって何らかの仕方で利用されうる特有の何かを『生産』するシステムである。すなわち、ある組織のアウトプットはほかの組織にとってはインプットなのである」(Parsons 1956: 17)。この定義のポイントは三つある。まず「目的」という概念、そして「集合体」という概念、そして「全体社会との関係性」への着目という三点である。

まず、目的とは他のシステムへのアウトプットである、とパーソンズは記している。パーソンズの関心は、組織を含み込む、より大きな社会(全体社会)のなかで、それぞれの組織が何を相互交換しているのか、ということであった。つまり、彼は組織の対外的分析——すなわち全体社会との関係=機能分析——を行うために、ここで目的=アウトプットという図式を提案したのである。

次に、集合体という概念について彼はいかに考えていたのだろうか。それは簡潔に「共通の価値システムでもって、その成員たちを統合したもの」とされ、詳しくは「成員によって分有された集合体としての目的を有し、そのシステムの構成要素たる役割の当事者によって限定された境界をもつもの」とされている(Parsons et al. 1951: 192=一九六〇、三〇三)。

そして、ここからがパーソンズ自身の特徴的な理論構築であるが、彼は社会システムの一種として「成員である諸個人が、分有された集合体の目的を達成するために、成員相互間で、また他の社会システムの成員との間で相互作用する」(Parsons et al. 1951: 192=一九六〇、三〇二)ときにそれを「集合的行為者」と呼ぶ。

すなわち彼は集合体を「行為者」ないし「行為システム」として分析するのである。彼の行為論のなかでは、行為主体は個人に限定されるものではない。そのことはとりわけ中期の著作『行為の一般理論をめざして』に顕著である。それは、「私たちは、行為を記述するにあたって、行為する単位が個人であろうと、集合体であろうと、行為者の行為志向について語ることにしよう」(Parsons et al. 1951: 4=一九六〇、五)、「行為者は個人かもしくは集合体であり、客体に関しての行為志向とその仮定の諸様式とを分析するための準拠点として、そのどちらをとることもできる」

(Parsons et al. 1951: 56＝一九六〇、九一）といった言明にみることができる。

ここで、パーソンズによる行為の定義を確認しておこう。パーソンズのいう行為とは、①目的を有し、②状況内において生起し、③規範によって規制され、④エネルギーや努力、あるいは「動機づけ」る力の消費を含む行動のうち、分析され、また分析されうるものが「行為」である(Parsons et al. 1951: 53＝一九六〇、八六)。この定義は個人としての行為者のものであり、これが行為主体が個人ではなく集合体のときには④の側面は捨象されるが、①②③という共通点から、パーソンズは集合体を行為者として分析する方向に進むのである。このなかで、本稿にとって重要なのは①に顕著にあらわされているように、集合体は何らかの目的を有しているということである。

ともかくも、パーソンズは行為者の定義に目的を与件として設定し、その行為者という概念を今度は集合体の分析に適用するのである。当然の帰結として、その際には集合体も目的をもつものとして描かれることになる。

ここまでの議論を簡単に纏めておこう。まず、パーソンズは社会に関するあらゆる現象を「行為」ないし「行為システム」という見地から分析しようとした。組織という現象を分析する際にもそれはかわらない。「行為者としての組織」という見地に立てば、当然、組織という対象は行為者と同様に「目的」を有する存在として考えられることになる。このように目的を「埋め込んだ」組織という概念は、組織とその外的環境との相互交換を分析するためにパーソンズが生み出した組織像であった。彼は組織を「行為者」として、かつその外側から「科学者」として、この対象を観察するのであった。

パーソンズは、組織をある種の「行為者」として分析した。それは、組織のなかで個人行為者が行為し、その行為が何らかの機能を営んでいるという図式を、全体社会のなかで集合的行為者が行為し、その行為がまた何らかの機能を営んでいるという図式に連結するためであった。彼は「行為」、そして「目的」という概念でミクロからメゾそしてマクロへの連結を試みたのである。

行為者とは明らかに目的を有する存在である。しかし、そういった行為者の集合体を分析するためには、行為者の数だけある多様な目的を一つに収斂させる必要がある。そこで、分析概念として集合体レベルの「目的」を科学者が設定する。次に、全体社会を分析する際にはその集合体のあいだでの「相互行為」を分析しなければならない。その際には、再び多様な集合体の目的を一つに収斂する必要が生じ、科学者は新たな「目的」を設定する。このような目的の「創発」が繰り返されるのである。

もっとも、そのような理論構築は、決して彼の欠点では

ありえない。彼の関心は行為を分析単位とした社会の体系的な理論を確立することにあった。社会学を「科学」として、自然科学あるいは社会科学における経済学のように体系だったものに精錬するために彼は一生を賭した。その意味では、彼は理論の定式化（formalization）を確信犯的に行ったのである。

また、科学者の地位＝身分にかんしても彼は特徴的である。パーソンズは周知のごとく、自然科学と社会科学の差異を認めなかった。彼は当事者の純粋な「主観的」意図を見ることはなく、「客観的」な科学者として、当事者を「行為者」という科学的な概念に適合させ、かつその適合した現象のみを「行為」として描き出した。A・シュッツ研究者の那須壽がいうように、彼は分析的リアリズムの立場から「科学的には確定不可能な行為者の主観的観点を、科学者の頭のなかで科学の論理によって析出された『規範的価値指向』へといっきに解消」（那須、一九九七、九三）しようとしたのである。しかし、「規範的価値という概念を導入することによって、行為者の観点からみて彼の心のなかで実際に何が生じているかを問うことはできない」（那須、一九九七、一二一）のである。

三　シンボルとして構築される目的
――解釈主義の目的観

これまで、パーソンズの組織論の特色について述べてきた。では、パーソンズの理論とは位置づけが異なるとされる現象学的社会学ならびにシンボリック相互行為論において、組織とは、そして組織目的とはいかに説明されるのだろうか。本節では、シュッツ、そしてブルーマー、さらにはA・L・ストラウスの議論を参照しながら、議論を展開する。

まず、シュッツであるが、彼は主として行為論の文脈でパーソンズと自らの差異を表明する。それはシュッツとパーソンズの『往復書簡』（Schutz and Parsons 1978）に鮮明にあらわされている。しかし、この往復書簡における両者の「すれ違い」は甚大なものであり、ある種不毛な「論争」であったという見解が今や通説になっている。そのなかで、那須はこの「すれ違い」の法則性というべきものに着目し、両者の見解を整序し、差異を際立たせている（那須、一九九七、一一二―四五）。以下、那須の見解をもとにシュッツが言いたかったことは何か、パーソンズにいかに伝わらなかったか、ということをみていきたい。端的にいえば、シュッツの考える行為者の「主観性」とパーソンズの考える行為者の「主観性」が大きくかけ離れたものであった、

ということである。パーソンズは、規範的カテゴリーの概念によって行為者の主観性は十分に自らの分析図式に含まれている、と考えていたのに対し、シュッツは行為者が真に抱いている主観性をいかにしてみることができるか、という点に着目していた。シュッツにとって、行為とはある時間的な継続のなかで行為者が企図（project）するという「進行中の過程」であり、パーソンズのように科学者の観点から「切り取られた」単位ではない、彼はそのことを力説したのであった。ここでは、両者の科学のあり方に対する立場の違いが浮き彫りにされている。パーソンズは、社会学を行為の学問として体系化するという理論の定式化に関心を寄せていた。そのためには、行為者の「主観性」として「規範的カテゴリー」を導入することが必要であり、またそれを導入することで十分であった。その彼は、行為者を、目的を有し、それに向かって多様な状況のもと、規範的価値の示す方向へ自らのエネルギーを費やす、という存在として考えた。そして、そのように行為している者のみを「行為者」と定義したのである。他方、シュッツが「主観的観点」に立つ、という言葉で示唆しているのは、あくまで「行為者本人にとってその行為はいったい何を意味しているのだろうか」（那須、一九九七、一二二）ということであった。「主観性」に関する見地の相違から導かれる、両者の行為論の溝は深かった。シュッツはあるがままの行為者をパーソンズのように科学者が創り出した「行為者」という分析概念に一般化することの危険性を感じていたのである。

行為論においてもパーソンズとの差異を示すシュッツにあって、組織という対象はその眼にどのように映っていたのだろうか。残念ながら、シュッツ自身は組織論をそれほど明示的には展開しなかった。ただ、シュッツの影響を直接的・間接的にうけた理論は多く存在している。そのうちの一つがシンボリック相互行為論である。片桐雅隆は、そのなかでもシュッツの理論を組織論として展開するには、ブルーマー的なシンボリック相互行為論の見地が要請されるだろうとの見解を以前より示しているほか（片桐、一九八三）、近年ではストラウスの『鏡と仮面』（Strauss 1997）を分析するなかで、シンボリック相互行為論の構築主義的なスタンスを重視しながら、組織という主題について考察を加えている（片桐、二〇〇一）。

では、まずブルーマーの理論の主旨にあたる箇所をいくつか引用してみよう。彼は、「一つのネットワークや制度は、なんらかの内的な動学とかシステムの要件とかによって、自動的に機能するわけではない」（Blumer 1969:19＝一九九一、二五）、「組織とその部分の活動を、組織原理またはシステム原理に即して説明しようとするかわりに、シンボリック相互行為論は、参加者が、自分の置かれたさま

ざまな位置で、どのように状況を定義し、解釈し、そしてそれに対処していくのかを説明しようとする」（Blumer 1969: 58＝一九九一、七三）といったように、機能主義を批判するスタンスをとっている。つまり、ブルーマーは組織をそれ自体の原理や動学によって作動するものとはとらえずに、参加者や相互行為者の状況定義にさかのぼって考察しようとするのである。

また、先のターナーへの返答の中で、ブルーマーが連携的行為とは、行為の「組織 organization」ではなく、行為の「組織化 organizing」である、と明示的に述べていたことは特筆に値する。これは、K・E・ワイクが「組織」という静態的な名詞を避け、「組織化」という動名詞＝進行形を積極的に使用することを重視したスタンスときわめて類似している（Weick 1979）。シュッツが行為を進行中の過程として分析したのとパラレルに、ブルーマーは組織を進行中の過程として考えていたのである。パーソンズとシュッツのあいだに見られたような「すれ違い」をここにも発見することができる。

しかし、ブルーマーもシュッツと同様に、組織という対象についてそれほど議論を展開しなかった。確かに、良い意味でも悪い意味でも、ターナーが指摘したように、彼の理論のなかには「補足概念」が見あたらないのも事実なのである。

では、最後に、ストラウスから、われわれは何を学びとることができるのだろうか。片桐は、ストラウスを構築主義的なスタンスをとるシンボリック相互行為論者として評価を与えている。その点において、ブルーマーのような主体主義的なシンボリック相互行為論とは一線を画し得る存在であるとしている。

片桐は、ストラウスの理論を読み解くなかで「記憶」という概念に着目する。そして、この記憶がシンボルとして共有されることで、メンバーシップが成立し、相互行為を可能にさせるという見解を述べている。このストラウスの理論のなかでは、記憶をはじめとしたシンボルは、当初から成員によって共有されてはいない。むしろ、この共有化のプロセスこそが重要なのである。すなわち、シンボルとされる資源がいかに共有されていくのか、またシンボルとは何らかの意味が共有されているものであったとしても、その意味がどのように共有されていくのかというプロセスこそが第一義的な研究対象となるのである。

本稿でとりあげる組織目的についても同様のことがいえる。この組織目的とは、当事者の記憶を資源として成り立つ〈シンボリックなモニュメント〉のようなものなのである。それは絶えず当事者によって再解釈の対象となる。解釈主義の立場からは、組織に目的が所与として「埋め込まれ」ている、という機能主義の見解は否定される。組織目

的にせよ、組織それ自体にせよ、それは人々の相互行為から構築されるものである。それはシンボルへの意味の付与、そしてそのシンボルの解釈という行為によって成立する。つまりは、組織目的というものも「行為者」ないし「当事者」による絶えざる解釈――シュッツの言葉では「進行中の過程」、ブルーマーの言葉では「組織化の過程」――を迫られる一つのシンボルである。これは自らが相互行為を行うために、相互行為のなかから意味を与えられたものであり、そのシンボルを準拠点とすることで安定的な相互行為が可能になるのである。

すなわち、解釈主義の立場からすれば、組織目的というものは科学者ではなく、当事者が創り上げるものである。そしてその組織目的を当初から成員によって共有されたものとして「切り取って」分析するのではなく、その共有化のプロセスに関心を寄せるのである。

さて、このような解釈主義の立場から、本稿の主題である組織目的について、以下のような結論を導いておこう。

まず、解釈主義者の考えるシンボル概念は、構造に規定されないという意味で主観的で自由な対象であるかのようだ。しかし、第二次世界大戦における日本軍という軍隊組織は、成功体験という記憶に規定されることによって、決定的な失敗に行き着いた。決してこの事例は過去の軍隊という特殊的なケースではない。企業でも、過去の成功体験が災いして、新規事業に二の足を踏んだり、誤っていると知りながらも失敗を認めることなく突き進んだ結果、取り返しもつかないような事態に陥ったりすることがある。このような事例に対して、その原因を組織文化というものの「かわりにくさ」に求めることが多い。しかし、組織文化そのものというよりは、その組織文化を正当なものと根拠づけてきた前組織文化的なもの、すなわち組織の記憶というものにその原因があったのではないかと考えられる。文化を文化として共有し、相互行為を行ってきた当事者は、組織の記憶を、神話や英雄伝説というかたちでパッケージ化することで組織文化を形成し、またその組織文化を組織目的としてコード化し、共有化をはかっていると考えることができるのである。[2]

おわりに――客観主義と主観主義を越えて

本稿の目的は、機能主義と解釈主義を対比するなかで、組織目的という概念を再考することにあった。ここで、得られた結論を簡単にまとめておこう。

論点の一つは、組織目的はいったいどのようなものであるかということであった。すなわち、所与的なものなのか、事後的なものなのか、という点である。次に、組織目的を創り出すのは誰か、という点である。すなわち、科学者な

のか、当事者なのか、という点であった。パーソンズは科学者として、そして組織を行為者として分析することで、両方の論点を「いっきに」乗り越えようとした。他方、解釈主義にたつシュッツやブルーマーらは、あくまで行為者の主観的な側面をそのまま分析しようとした。どちらの理論が正しいかということはもちろん一概に言えることではない。しかし、両者を乗り越える立場があるとするならば、やはり両者ともが重視したシンボル概念をさらに精緻化することに可能性があるだろう。

そのシンボル概念への着目、という点において示唆的な見解を示しているのが組織シンボリズム[3]である。彼らによれば、機能主義者はシンボルを「社会的秩序の維持装置」として捉えるところに特徴があるのに対して、解釈主義者はシンボルを「個人がそれらを通して自らの世界を創造するのに不可欠なメディア」として捉えるところに特徴がある（Morgan et al. 1983）。このように、シンボルには少なくとも二つの側面があり、そのアンビバレンスに着目することで、機能主義の有するいわば決定論的なスタンスと、解釈主義の有する主観性を過度に強調するスタンスの双方から距離を置くことができると考えられる。素朴な決定論としての客観主義と、主観性の誤謬に陥りやすい主観主義を同時に乗り越えようとするならば、機能主義と解釈主義の共通点であったシンボル概念を彫琢することが不可欠なのである。

註

（1）本稿における「目的」は「目標」という用語と同意である。英語では、goal, end, purpose, objective など様々な用語が各組織論者によって使われるが、それが指示する内容はほぼ同一のものである。定訳がなされている場合は目標という用語も使用するが（例えばパーソンズのいう goal-attainment＝目標達成）、それ以外はおおよそ目的という用語で統一したい。

（2）組織文化と組織目的の関係については、別稿を参照（竹中、二〇〇二）。

（3）組織シンボリズムについては別稿を参照（竹中、二〇〇二）。

文献

Blumer, H., 1969, *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, New Jersey: Prentice-Hall, Inc.（＝一九九一、後藤将之訳『シンボリック相互作用論 ―― パースペクティブと方法』勁草書房）。

Blumer, H., Parsons, T., and Turner, J. H., 1974, "Exchange on Turner, 'Parsons as a Symbolic Interactionist,' Vol. 44, No. 4," *Sociological Inquiry*, 45(1): 59-68.

Burrell, G. and Morgan, G., 1979, *Sociological Paradigms and Organizational Analysis.*, Heinemann.（＝一九八六、鎌田伸一他訳〔部分訳〕『組織理論のパラダイム ―― 機能主義の分析視角』千倉書房）。

片桐雅隆、一九八三、「組織への『解釈的社会学』からのアプローチについて――シュッツ理論の発展方向を探るために」『人文研究』三五、三二―五五。
――、二〇〇一、「『メンバーシップと記憶』論の構想――A・ストラウスの『鏡と仮面』を基点として」船津衛編『アメリカ社会学の潮流』恒星社厚生閣、一四五―一六九。
Morgan, G., Frost, P. J. and Pondy, L. R., 1983, "Organizational Symbolism," L. R. Pondy, P. J. Frost, G. Morgan and T. C. Dandridge eds., *Organizational Symbolism*, Greenwich: JAI Press Inc.: 3-35.
那須壽、一九九七、『現象学的社会学への道――開かれた地平を索めて』恒星社厚生閣。
Parsons, T., 1951, *The Social System*, New York: The Free Press. (＝一九七四、佐藤勉訳『社会体系論』青木書店)。
――, 1956, "A Sociological Approach to the Theory of Organization," in T. Parsons, 1960, *Structure and Process in Modern Society*, New York, The Free Press: 16-58.
Parsons, T. et al., 1951, *Toward a General Theory of Action*, Cambridge: Harvard University Press.(＝一九六〇、永井道雄・作田啓一・橋本真訳〔部分訳〕『行為の総合理論をめざして』日本評論社)。
Schutz, A. and Parsons, T., 1978, *The Theory of Social Action: The Correspondence of Alfred Schutz and Talcott Parsons*, Indiana University Press. (＝一九八〇、佐藤嘉一訳『社会理論の構成――社会的行為の理論をめぐって』木鐸社)。
Strauss A. L., 1997, *Mirrors & Masks: the Search for Identity*, with a New Introduction by the Author, New Brunswick, N.J. :Transaction Publishers. (＝二〇〇一、片桐雅隆監訳『鏡と仮面――アイデンティティの社会心理学』世界思想社)。
竹中克久、二〇〇一、「不断に再生産される組織――コミュニケーションを軸とした組織概念の再考」『ソシオロジ』四六（二）、五七―七二。
――、二〇〇二、「組織文化論から組織シンボリズムへ――〈シンボルとしての組織〉概念の提唱」『社会学評論』二二〇、三六―五一。
Turner, J. H., 1974, "Parsons as a Symbolic Interactionist: A Comparison of Action and Interaction Theory," *Sociological Inquiry*, 44(4): 283-294.
Weick, K. E., 1979, *The Social Psychology of Organizing*, (second edition), Addison-Wesley Publishing Co., Inc. (＝一九九七、遠田雄志訳『組織化の社会心理学（第二版）』文眞堂)。
Wilson, T. P., 1970, "Normative and Interpretive Paradigms in Sociology," J. S. Douglas ed., *Understanding Everyday Life*, Chicago :Aldine Pub. Co.: 57-79.